

第36回外国人芸術作品展(FAE36)を開催しました!



CJIS賞

昨年11月2日から7日まで、名古屋国際センターにて「第36回外国人芸術作品展(FAE36)」を開催しました。

この作品展は毎年、外国人ボランティア団体「セントラル・ジャパン・インターナショナル・ソサエティ(CJIS)」と公益財団法人名古屋国際センター(NIC)が開催しており、今回で36回目となりました。17か国45名の外国人アーティストによる約250作品が展覧され、6日間でのべ624名の来場がありました。

検温と消毒、ソーシャルディスタンスの確保等、新型コロナウイルス感染予防対策を徹底した会場で、来場者は作品を鑑賞し、アーティストとの交流を楽しみました。



名古屋国際センター
理事長賞



作品を鑑賞中



アーティストと作品



授賞式

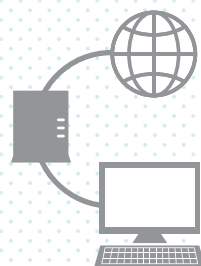


貸し施設

名古屋国際センターは、9時から21時まで、ホール、会議室、研修室、和室、展示室の大・中・小、14種類の各種施設を貸し出しています。会社説明会や社内研修、異業種交流会、展示会など、さまざまな用途に合わせてご利用いただけます。国際交流を目的としてご利用の場合は、よりお手頃な料金でご利用いただけます(事前申請が必要です)。



全施設で有線インターネットが利用できます!



安全かつ安定した環境でインターネット接続が可能です。

Web会議やWebセミナーにも、ぜひご活用ください。

※お持ち込みになるPC等の事前確認をお願いします(有線LAN対応など)。
※他の利用者の利用状況、お持ち込みになるPCの設定やスペック、利用されるツール等によって、つながりにくい場合があります。



別棟ホール



研修室

問 名古屋国際センター総務課 貸し施設 ☎ 052-581-5679 (受付時間: 毎日9時~17時30分)

※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、ガイドラインに沿ったご利用をお願いしています。
また、各施設の利用人数等が制限される場合もあります。最新情報はNICウェブサイトでご確認ください。

皆様のご利用を
お待ちしております。

なごや 国際交流通信

隔月刊 ニック・ニュース

名古屋国際センター
NAGOYA INTERNATIONAL CENTER

NIC NEWS

愛称はニック(NIC)です

Nagoya International Center



NIC NEWS

特集

在住外国人の「高齢化」を考える



名古屋国際センターへは、地下鉄桜通線「国際センター」駅下車が便利です。

情報満載

<https://www.nic-nagoya.or.jp/>

各種お問い合わせは、
3階情報カウンターまでどうぞ。

☎ (052) 581-0100



●情報サービスコーナー、ライブラリー●
火~日曜日9:00~19:00(月曜休館)

●貸し施設●
月~日曜日9:00~21:00(予約受付は9:00~17:30)

名古屋国際センター休館のお知らせ

2月13日(日)はビル設備点検のため休館します。

●特集

P1~P4

●NICレポート

P5

「ライブラリーで世界を学ぼう!(インドネシア編)」
インターンを終えて

●ぶらりライブラリー

P6

本のリサイクルコーナー
グローバルに活躍する若者たち
グローバルユースカフェ
「NICグローバルユースデー2022」開催!

●ともくら

P7

馬 照哲さん(中国)

●姉妹友好都市・パートナー都市の広場
名古屋・トリノ姉妹都市提携15周年記念公式行事

P7

●国際留学生会館から
章 露彬さん(中国)

P8

●やさしい日本語をしよう!
「やさしい日本語」×「防災」×「カルタ」で楽しく学ぼう!

P8

●NIC PAGE

P9-P10

●第36回外国人芸術作品展(FAE36)

裏表紙

●名古屋国際センター貸し施設

表紙の絵は姉妹・友好都市児童生徒画展の出展作品(詳細は10ページ)

隔月刊「ニック・ニュース」
発行・編集 公益財団法人名古屋国際センター

No.408 令和4年2月1日発行

※本事業は名古屋市の指定福祉事業です。

〒4500001 名古屋市中村区那古野一丁目47の1 名古屋国際センタービル内
TEL 052-581-0100 FAX 052-581-4673
E-mail info@nic-nagoya.or.jp URL https://www.nic-nagoya.or.jp/

制作デザイン 中島達夫デザイン印刷株式会社

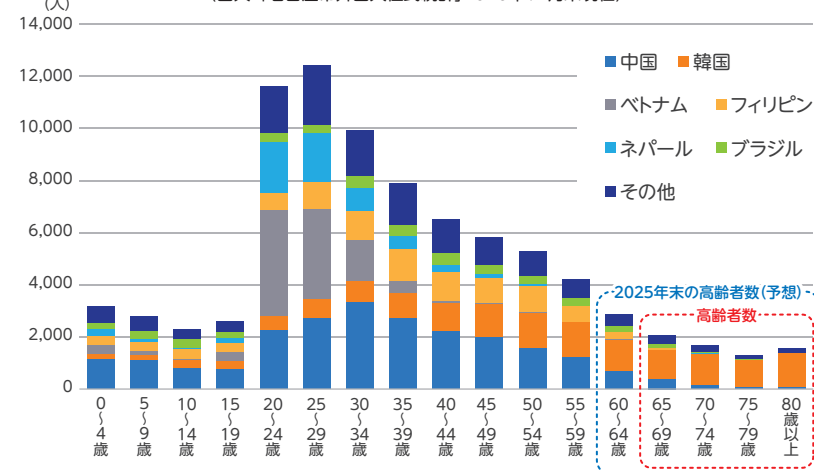
在住外国人の「高齢化」を考える

名古屋市には、79,418人(2021年12月1日現在)の外国人の住民がいます。新型コロナウイルスの感染症の影響で、外国人住民の数は減っていますが、既に日本社会に定住している外国人に大きな変化はありません。

今回の特集では、愛知県がまとめた『外国人高齢者に関する実態調査報告書～ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために～』(2021年2月)をもとに、名古屋市内で高齢者対象の支援事業に携わる関係者の声を交えながら、「高齢化」する外国人住民への対応について考えます。

名古屋市内在住外国人年齢別内訳(2020年末)

(出典:「名古屋市内外国人住民統計」2020年12月末現在)



名古屋市在住の外国人高齢者数

65歳以上の外国人住民は2020年末現在6,572人(7.8%)で、5年後の2025年末には、2,857人増(3.4%増)の9,427人(11.2%)と予想されます(帰国や死亡等の要因は反映していません)。

2021年10月1日現在の日本人を含む高齢者人口は574,039人(25.0%)と比較すると、まだ数字的には大きなものではありません。しかし、外国人の方々の定住化が進んでいる現状において、長期的には確実に増加していくものと考えられます。

『外国人高齢者に関する実態調査報告書～ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために～』から

この調査では、外国人高齢者の対応について先進的な取り組みをしている関係団体・機関へのヒヤリングと愛知県内の地域包括支援センター(高齢者の暮らしを地域でサポートするための拠点として、自治体などにより設置されている機関)へのアンケート調査に基づき、外国人住民への対応の課題を以下のようにまとめています。

課題

- A 【言葉の壁・コミュニケーションの問題】**
 - ◆「言葉が通じない」ということが一番大きな課題。日本語を習得していても、認知症等で忘れてしまうことがある
 - ◆介護に直面した場合、本人や家族が日本語能力を備えていても、面談や介護保険制度等の説明への対応は困難
- B 【通訳の専門性と必要性】**
 - ◆介護制度には専門用語や個人情報を取り扱うことが多く、専門知識を持つ介護通訳がいない
- C 【制度の理解不足と文化等の違い】**
 - ◆本人や家族の、介護保険制度や高齢者の特性、認知症に対する知識や理解の不足
 - ◆環境や文化の相違による、支援者との相互理解の不足
- D 【多文化・多様性への理解と配慮】**
 - ◆介護サービスの提供において、母語や母国文化、民族性などへの配慮や個性を尊重した支援ができていない
 - ◆外国人の受入経験の少ない地域や施設との情報共有ができていない
- E 【外国人高齢者の孤立】**
 - ◆日本の福祉・介護サービスが合わずに、引きこもりになる可能性も高い
 - ◆高齢者の安否確認等の場面において、外国人住民に対応できる関係者が少ない
- F 【外国人高齢者の異なる文化の「終活」】**
 - ◆相続や葬儀、お墓など「終活」に関する知識や情報の不足
- G 【外国人高齢者に関する課題の多様性】**
 - ◆行政をはじめ様々な分野の多様な主体による連携・協働が必要

求められる施策や方向性

外国人の高齢化や介護に関する現状把握と問題の周知 D E F



外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト 代表 木下 貴雄さん

中国出身の木下さんは、同団体を立ち上げた2014年の翌年から、専門知識を持った中国語の介護通訳を育成・派遣する事業に取り組んでいます。木下さんら同団体の活動の功績が認められ、昨年、日本地域福祉学会の「地域福祉実践優秀賞」を受賞しました。今回紹介した「報告書」も同団体が企画・編集を担い、木下さんが中心となつてまとめました。「外国人住民自身も、自分たちが日本で老後をどう送るのかを考え、自らが担い手となって協力し合いながら取り組んでいくことが必要」と木下さん。多文化共生の先に外国人の高齢化や介護・終活の問題があり、それらに対するアクションの必要性を強調します。

この活動のきっかけ、そして自身の多岐にわたる情熱ある活動の始まりについて、「私自身が父の介護で困ったことです。父を一昨年に見送りましたが、母や親族に日本での介護や看取りを伝えることに苦労しましたから」と木下さんは静かに語りました。



▲木下さんが企画し、全国から100名以上が参加した「外国人高齢者問題を考えるセミナー」の様子。多文化社会の終活事情も紹介されました。

- 実態調査による現状把握
- 外国人住民の高齢化や介護に関する啓発
- 関係者に対する外国人の高齢化や相談対応等に関する研修会の実施

介護通訳の検討・準備 A B

外国人ヘルプライン東海 代表 後藤 美樹さん

外国人ヘルプライン東海では、自治体から調査を委託された民間会社等からの依頼に基づき、介護認定調査にかかる通訳派遣を行っています。後藤さんが関わるフィリピン人移住者センター(FMC)の関係者の中には、日本人配偶者やその家族を介護している人が多くいるそうです。ケアをする家族が外国人の場合も、やはり制度や手続等の面で言語的な支援が必要になります。

また、あるフィリピン人から「自分と接しているヘルパーさんは、非常に専門性の高い技術を持つプロの人。『ヘルパー』という用語は昔の『お手伝い』を連想させ、とても失礼な感じを抱く」と聞いた後藤さん。「日本の制度で使用している用語ひとつにしても、それを異なる文化背景を持つ人が正確に理解できるよう伝える必要がある」と言います。



▲外国人ヘルプライン東海が行っている、外国人相談会の様子

- 介護通訳の養成や派遣制度検討・準備
- 通訳を利用しやすい環境(ビデオ通訳や電話等を活用)の整備

多様な立場にある機関や団体、個人との連携 & 外国人住民への年金や介護保険制度の周知

A C G E



NPO まなびや@KYUBAN 代表 川口 祐有子さん

川口さんは、外国人が多く住む名古屋市港区の九番団地を拠点に、さまざまな多文化共生活動を行っています。1990年の改正入管法の施行以来、「定住者」の在留資格でブラジルをはじめ多くの南米出身者が住むようになりましたが、最近では、ベトナムやミャンマー出身の住民も共に暮らしています。九番団地における60歳以上の外国人世帯主は60人で、夫婦や家族同居を含む外国人高齢者は100人を超えているものと推測^{※1}されます。川口さんによると、特にブラジル人は高齢になっても身体への負担の大きい仕事をしている人が多くみられるそうです。働けるうちは働き、最後はブラジルで迎えたい。そう思っている人が多いと感じるとか。また、ブラジルに限らず、出身国の高齢者向けの施策と日本のものと違いがある場合、制度自体の理解が難しいとのこと。近年は、外国人高齢者の孤独死も起こっており、**高齢者が直面する問題に取り組む必要性は高まっている**と感じているそうです。

外国人住民には、言葉や経済的な理由から、病気になっても受診を敬遠する人も多々見られます。同団体では、地元の病院の協力を得て、団地内でバイタルチェックのサービスを行ってきました。現在のコロナ禍では実施できませんが、状況が落ち着いたらまた再開の予定だそうです。「**高齢者の孤立を防ぐために、気楽に集まれる居場所づくりが求められています**」と川口さん。「看護師や社会福祉士が常駐する『街なかの保健室』のような場所を作って、そこを訪れば健康チェックや相談、おしゃべりや料理教室などもできるような、**高齢者の交流や生きがいにつながる活動を**考えています。ここで歳を重ねていきたいと思ってもらえる地域にするために」と話しました。

- 地域包括支援センター等に協力依頼できる体制の整備
- 多様な機関が連携した外国人高齢者支援ネットワークの形成
- 介護保険制度のパンフレットや資料の多言語化、やさしい日本語化の整備
- 本人や家族に対する介護保険制度やサービス等の説明会の実施

外国人高齢者に配慮した環境整備 A B



金洋国際サポート株式会社 代表取締役 馬 照哲さん^{※2}

中国出身で、名古屋市北区でデイサービス(地域密着型通所介護事業所)、居宅介護支援、訪問看護リハビリステーションの三つの事業所を運営する馬さん。中国にルーツを持つ人も含め、毎週60人ほどがデイサービスを利用しています。生活相談員(介護福祉士)を勤める馬さん、中国で医師だった母親、鍼灸師、看護師や理学療法士等のスタッフがチームを組んで事業にあたっています。

プログラムの内容は、健康管理、機能改善運動、食事、脳トレニング、マッサージ、鍼灸、太極拳と盛りだくさんで、時に中国語も飛び交う楽しいひとときです。馬さん曰く、中国人の経営だからといって、わざわざ遠方から通ってくることは多くはないとのこと。デイサービス、ケアプラン作成や訪問看護リハビリは、あくまで**地域密着のサービスで、誰もが利用できるもの**です。日本人の利用者にお話を聞くと「やさしく対応してくれるし、時には中国のことも教えてくれます。ここへ来ることを毎回楽しみにしています」とのこと。「中国人利用者の方は、やはり母語が通じるので安心のようです。中国人から寄せられる問い合わせや相談に中国語で対応すると、相手の声がとても元気になって、嬉しくなります」と馬さん。**中国語でも対応できる地域に役立つ人材を目指している**そうです。

また、同事業所で馬さんのもと働きはじめたミャンマー出身のセイン イ ラインさんは、昨年の夏までは宮崎県で技能実習生としてシャツの生産に従事していました。コロナウイルス感染症の拡大で帰国がかなわず、今は特定活動の在留資格で、介護分野での特定技能の資格取得を目指しています。介護の現場には、その担い手として多くの外国人が活躍しています。



▲デイケアセンターで、利用者の状態について、理学療法士と確認する馬さん(左)



▲太極拳で運動を。右端がミャンマー出身のセイン イ ラインさん



ケアプランモーメント 代表理事 金 順愛さん

外国人高齢者の中で最多を占めるのは、在日コリアン(在日韓国・朝鮮人)です。自身も在日コリアンである金さんは、東海地方で在日コリアン1世のためのデイサービス事業を初めて設けたNPOで、18年に渡る活動を通して中心的な役割を果たしてきました。2021年に有志と二人で独立し、現在は名古屋市千種区で居宅介護支援事業を行っています。新しい事業を始めるにあたっては、多文化共生の流れの中で、自身が培ってきた知識・経験を国籍や民族の枠を超えて活かしたいとの思いがあったといいます。金さんはケアマネジャー(介護支援専門員)として、地域の介護事業所として、日本人・外国人を問わずケアし、利用者から信頼を得ています。

市内の地域いきいき支援センター(地域包括支援センター)からの依頼で、フィリピン人のケアプランを作成した際、外国人ヘルプライン東海の後藤さん(既出)の通訳を介して、本人の自立心と自尊心を尊重したプランを作成することができました。「**日本での高齢化への対応について、在日コリアンが多くの経験を積み重ねてきました。その経験と知恵を他の国の出身の方々とも共有していきたい**」と語る金さん。フィリピン人の支援グループとの情報交換も呼びかけています。

- 外国の言葉や文化に精通した多文化介護人材(介護スタッフ・ケアマネジャー)の養成
- 外国人住民が介護人材として活躍できるような人材育成や環境整備
- 高齢者が、周囲に遠慮することなく、母語や母国文化の中で生活できる居場所づくり

異なる文化の終活への対応支援 F

名古屋国際センター情報カウンターにも「終活」について、問い合わせをいただくことがあります。「火葬せず、遺体を母国に送ってほしい」、「土葬をしてほしい」など。文化や宗教により、葬儀や埋葬の仕方も異なります。日本での葬儀の仕方が分からず、戸惑う外国人住民もあり、彼らを対象に葬儀に関するサービスを行う団体も出てきています。多様な死生観、葬儀や埋葬の在り方への対応が求められています。^{※3}

- 外国人住民への終活のための情報提供や説明会の実施
- コミュニケーションをサポートする制度や人材の育成

※1 2018年8月末現在。中駒産業株式会社調べ

※2 P7の「ともく」のコーナーでも紹介しています。

※3 日本の埋葬方法のうち火葬が占める割合は99.9%。日本の墓地埋葬法で土葬は禁止されている(条例により禁止している自治体はあり)。欧米等の火葬率は、米国51.5%、フランス39.5%、イタリア23.9%等となっている。(出典:イギリス火葬協会発行「ファロス」2018年冬号)

まとめ

「いつまでも元気でいられる」と思っている、本人が気づかないうちに来るのが「老い」です。生きている限り、国籍に関わらず誰もが避けては通れないのが「高齢化」であり、その対応に当人も周囲も一人ひとりが準備をしていく必要があります。

「外国人高齢者の問題は、社会に徐々に認識されるようになってきたものの、関係機関による具体的な対策には至っていない。この問題に立ち向かうには、国や自治体の行政、福祉・介護の関連機関、そして地域社会等が共に手を携えて取り組まなくてはならない。そして、外国人住民自身も、自分たちが日本で老後をどう送るのかを考え、自らが担い手となって協力し合いながら取り組んでいくことが必要」と木下さん(既出)は語ります。まずは、外国人住民が利用できる現行の制度について丁寧に伝え、彼らが必要としていることを理解し、当事者と関係機関が共に手を携えて課題に取り組むことが求められています。

「外国人高齢者に関する実態調査報告書」はこちらでご覧いただけます。▶▶▶
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokujinkoureisya-chousa.html>





「ライブラリーで世界を学ぼう！ (インドネシア編)」を開催しました！

NICライブラリー所蔵の図書資料などを利用しながら、外国人講師が母国文化を紹介する交流イベント。これまでベトナム、エクアドル、ネパール、中国を紹介してきました。

今回は11月7日、インドネシアをテーマにオンラインと対面で開催しました。当日は、インドネシア西部に位置するジャワ出身のラザンさんと東部の東ヌサトゥンガラ出身のフラディさん、それぞれの民族衣装で着飾ったお二人が講師を務め、地域による言語や文化の違い、日本との比較、出身地のエピソード、同国の社会の現状と将来などについて紹介しました。共通言語であるインドネシア語のほか、700以上を数える地域言語、東西に長く広がる国土の地域ごとの文化的な違いや共通点など、多様性あふれるインドネシアの魅力を大いに語っていただきました。

NICライブラリーでは、和書・洋書を合わせて約3万冊の図書を所蔵しています。今回のイベントの関連図書もございますので、ぜひお越しください。ご利用をお待ちしています。



▲ハフィヤンダ ラザンさん



▲フラディ ファリレンコ フランツガラダス アプパカル バエさん



▲今回のイベントの関連図書

「インターンを終えて」

NICでは、様々な事業での現場体験を通じて学生の視野を広げるインターンを受け入れています。昨年6月から約5か月間にわたって、主に「ワールド・コラボ・フェスタ2021」(以下WCF*)のステージ企画に携わった名古屋市立大学人文社会学部の蟹江梨乃さんに、自身の活動を振り返って感想を話していただきました。



私が担当したWCFのNICステージ企画「レッツ エスニック エクササイズ!〜世界のダンスでつながろう〜」では、「NIC地球市民教室」の講師3名(インド・ニジェール・ペルーの各国出身)がそれぞれ母国の文化を紹介しながら、一緒にダンスを踊りました。動画配信でのステージということで、映像の見せ方を考えたり、講師との打ち合わせをすべてオンラインで行ったり、コロナ禍ならではの苦労も多くありました。しかし、海外に渡航できない

今だからこそ、自宅から世界を体感でき、運動不足の解消にもなる楽しいステージを作ることができたと思います。今回のインターンシップの活動では、一つのイベントを作り上げる中でとても多くの学びがあり、自分自身を成長させることができました。この経験を活かし、今後何事にも積極的に取り組んで社会に貢献できるような人になりたいです。本当にありがとうございました。

*ワールド・コラボ・フェスタ(WCF)
この地域で国際交流・国際協力・多文化共生の活動に携わる諸団体が参加する交流イベント。2021年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ウェブで開催されました(2021年11月27日〜2022年1月10日)。NICは「ワールドステージ」に出演したほか、「コラボ広場」に「世界寺子屋運動ブース」を出展しました。



▶WCFステージの撮影の様子



特に目的があるわけではないけど、ぶらっと来てみたら、気になることに出来る場所。このコーナーでは毎回NICライブラリーを紹介します。

本のリサイクルコーナー

名古屋国際センターのライブラリーでは、毎年古くなった図書や雑誌、絵本等の有効利用と国際貢献を目的に、「本のリサイクルバザー」を開催しています。バザーにお越しいただいた市民の皆さまからの寄付金は、「世界寺子屋運動」名古屋実行委員会を通じて、日本ユネスコ協会連盟による開発途上国の識字教育環境の整備に充てられるほか、ライブラリー図書の購入に役立てています。

2020年のバザーは新型コロナ感染拡大防止のため、開催を中止せざるを得ませんでした。バザーを心待ちにしていた多くの方々からの問い合わせを受け、代替として、2020年12月からライブラリー施設内に「本のリサイクルコーナー」を設けたほか、2021年6月から8月末まで、リサイクルコーナーのスペースを拡大して実施しました。この3か月で集まった寄付金は53,621円でした。皆さまからのご厚志に感謝を申し上げます。

2021年12月から再びリサイクルコーナーのスペースを拡大して実施しています(2022年2月末まで)。様々な海外の本や雑誌が並んでいます。ぜひ手に取ってご覧ください。ご来館をお待ちしております。



本のリサイクルコーナー

場 所	国際センター3Fライブラリー内
期 間	2022年2月27日(日)まで (毎週月曜日及び2月13日(日)は休館)
開館時間	9:00~19:00
問 合 せ	広報情報課 052-581-0100



グローバルユースカフェ

若者たちが主体となって、地域や地球の課題をテーマに、イベント等の企画運営を行う「グローバルユースカフェ」プロジェクト。ミーティングを重ねる中、メンバーの間では、国籍や背景に関係なく気軽に集い、互いの夢や悩みを共有できるような「居場所」を作りたい!との想いが高まりました。その第一歩として、12月には、留学生を中心とした外国にルーツを持つ若者たちを対象に、交流会を実施しました。メンバーが企画したゲームなどを通し、参加者同士はすぐに打ち解け、笑顔あふれる時間となりました。今後もメンバーを中心に様々なイベントを企画していきます!



▲企画ミーティングの様子

NICは様々なイベントやプロジェクトを通し、グローバル&グローバルな活躍を目指す若者を応援しています。

「NICグローバルユースデー2022」

新しい一歩を踏み出したい方大歓迎! 3月5日(土)開催!

この地域を拠点に「グローバル & グローカル」に活躍する若者の団体や、これから活躍したい若者、彼らを応援したい人々がつながって、それぞれに新しい一歩を踏み出すイベント。トークゲストには「フィリピンで一番有名な日本人」と話題のFumiya氏を招きます。グローバルに活躍するために必要な「発信力」「つながる力」とは?ぜひご参加ください。



▲Fumiya氏

「プログラム」	第1部 活動紹介	この地域で活躍する若者の団体の活動について知ろう
	第2部 トーク	ゲスト ▶Fumiya氏 (ソーシャルメディアクリエイター) ▶辰野まどか氏 (「(一社)グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)」代表理事)
	第3部 交流タイム	参加者同士の交流の中で、活動のアイデアやきっかけをみつけよう。

申込方法などは本誌「NIC PAGE」(10ページ)をご覧ください。



住みやすい健康な地域を目ざして

馬 照哲さん(中国出身)
金洋国際サポート株式会社 代表取締役

私は現在、名古屋市北区西味崎で、「デイサービス ノア」を運営しています。毎月、延べ200人程の方に利用していただいております。利用者の中には中国にルーツを持つ方もいらっしゃいます。その他にも居宅介護支援事業所として訪問看護リハビリも行っています。

中国で大学を卒業後に留学生として日本に来ました。「私の人生」「なりたい自分」とは何かをいつも思いめぐらす中、社会に役立つ事業を自ら手掛けたいと考えようになりました。中国で西洋医学と東洋医学に精通する医師だった母親の影響もあり、「健康」に関わりが深く、日本の社会で必要とされている「介護」の事業を始めたいことを決心しました。その起業の

ためには当然、必要な資格の取得、法令の理解、資金の調達など、越えなければならない多くのハードルがありました。自分の頑張りには家族の協力もあって現在に至ります。今ではその母も、長年の経験に基づく豊富な知識や技術を日本の介護の現場で活かしてくれています。

事業所の運営で最も嬉しいと感じるのは、利用者の笑顔に接することです。そのために、陶芸療法や絵葉書の教室、時には講師を招いた催しのほか、中国が発祥の太極拳の指導なども取り入れています。あふれる「笑顔」が「健康」につながっていると思います。地域の社会の一員として、これからも信頼される施設であるように頑張っていきたいです。



▲絵葉書教室。「笑」と「夢」を書いています



名古屋市とトリノ市は2005年5月27日に姉妹都市提携を結びました。15周年記念公式行事を実施しましたのでご紹介します。



名古屋の象徴「シャチ」とトリノの象徴「雄牛」をイメージした姉妹都市提携記念のロゴマークです。

名古屋・トリノ姉妹都市提携15周年記念公式行事 ～5Gを活用したオンライン交流イベント～

姉妹都市提携15周年となった2020年は、新型コロナ感染拡大の影響により、公式訪問団の派遣をはじめトリノ市との主な交流行事を延期。そして迎えた昨年11月5日に、「Nagoya×Torino」グローバル交流 with 5Gプロジェクト」と題し、名古屋商工会議所、トリノ商工会議所との連携のもと、最新のデジタル技術を活用したオンラインセミナーを開催しました。両都市間をオンラインで結んだ音楽の共演や産業用ロボットの遠隔操作による演出で、産業や文化のこれまでにない新たな形による海外交流イベ



▲遠隔ロボットを活用したテープカットの様子

ントとなりました。本イベントの内容や交流の様子はYouTubeで動画を配信していますので、ぜひ視聴ください。

URL (<https://nagoya-torino15th.jp>)のリンクもしくはQRコードから、本イベント特設ウェブサイトにアクセスできます。



▲遠隔コラボレーション演奏の様子

主なプログラム内容

- ◆遠隔ロボットを活用したテープカット
- ◆遠隔コラボレーション演奏
- ◆名古屋学院大学と連携した名古屋市の魅力発信

名古屋姉妹友好都市協会ウェブサイト
URL: <http://nsca.gr.jp/>



名古屋姉妹友好都市協会フェイスブックページ
URL: <https://www.facebook.com/nagoya.sistercities>



「藤前干潟クリーン大作戦」 ～清掃ボランティア活動に参加しました～

名古屋大学大学院国際開発研究科修士課程1年生
章 露彬さん(中国出身)

辛苦了
おつかれさまでした。(中国語)



昨年10月23日、名古屋市港区の藤前干潟で「第35回'21秋の藤前干潟クリーン大作戦」が実施されました。これは、地域のボランティア団体など1,000人超が参加するイベントで、ラムサール条約*の登録湿地である藤前干潟周辺に漂着したゴミの清掃を2004年から行っています。今回、国際留学生会館(以下ISC)から留学生など12名が参加し、市民の方々と共に汗を流しました。参加者のひとり、中国出身の章さんに当日の様子や感想などについて語っていただきました。



▲活動中の様子(中央が章さん)

私は、2020年12月に来日し、昨年3月からISCで生活しています。ISCに入居した理由は、様々な国出身の留学生との親交を深めることにより、自分自身の視野を広げるとともに、地域住民との交流やボランティア活動を通じて、多様な価値観に触れたいと考えたためです。

昨年10月には藤前干潟での清掃活動に参加しました。当日は他の留学生とともに、岩場まで流されてきた弁当の空

箱やペットボトルなどを丁寧に拾い集めました。しかしその数は膨大で、限られた時間内に全てを収集することは不可能でした。それでも皆が協力し合っ、ひとつの目的に向かって活動することができ、環境保護のために微力ながら役に立てたという思いで、充実感を得ました。

清掃活動の後に干潟の美しい光景を眺めながらお弁当を食べ、語らいの時間を持てたことも忘れられない楽しい思い出です。

これからも地域貢献活動に積極的に参加し、自分自身の成長に繋げていきたいと思っています。



▲参加者の記念撮影(後列左端が章さん)

*湿地の保存に関する国際条約。水鳥を食物連鎖の頂点とする湿地の生態系を守る目的で、1971年、イランのラムサールで開催された「湿地及び水鳥の保全のための国際会議」において、本条約が採択された。正式名は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。



国際留学生会館とは…

NICが2001年から管理・運営している、留学生専用の宿泊施設(名古屋市港区)。居室90室のほか研修室や和室、体育室などを備え、100名の留学生が生活できる。日本文化理解講座の開催や各種相談・情報提供、地域住民との交流などを行っている。



やさしい日本語を使おう!

「やさしい日本語」×「防災」×「カルタ」で楽しく学ぼう!

名古屋青年会議所が主催した「名古屋の国際化を推進する例会～Keep Up Your Dream～」で、NICが「やさしい日本語」のブースを出展しました!

皆さんは、NICの「やさしい日本語 防災カルタ」を知っていますか? このカルタは、大人も子どもも楽しみながら「やさしい日本語」を知ることができ、66語の防災用語について「やさしい日本語」への言い換えを学ぶことができます。また、日本語教室などで学ぶ外国人が、防災について知る教材としても広く活用されています。貸し出しも行っていますので、ぜひお気軽にお問い合わせください。

11月21日に同イベント会場のショッピングパーク「ららぽーと名古屋みなとアクルス」では、ブースを訪れた子どもたちがカルタ遊びに夢中! 親子で「やさしい日本語」を学びました。カルタを通して、みんなが「やさしい日本語」について楽しく知り、使うことで、誰にとっても優しいまちになることを願っています。



▲NIC防災サポーターの玉城エリカさんとカルタで遊ぶ子どもたち



この「防災カルタ」は、NICのやさしい日本語ボランティアが作成しました。他にも、生活に役立つテーマを取り上げ、「やさしい日本語」で情報発信をしています。ぜひ広くご活用ください!

やさしい日本語クイズに挑戦! from 防災カルタ

- ① 給水車 → ()
 - ② 停電 → ()
- やさしい日本語に言い換えてみよう!

やさしい日本語ボランティアによる作成物一覧&カルタ貸し出しに関する問合せについてはこちら▶



